

親鸞『観阿弥陀経集註』研究序説

三 木 彰 円

親鸞の『観阿弥陀経集註』（西本願寺所蔵）は、空罫等のない薄様の料紙（縦二九・五cm、横三八・八cm）三六枚を継ぎ合わせた卷子本である。その二八枚に『観無量寿経』が、八枚に『阿弥陀経』が丁寧に書写され、経文の校異が施された上で、経文の行間や上下の欄外、紙背に『般舟讚』を除く善導の著作を中心に、『称讚浄土経』、元照『阿弥陀経義疏』、『楽邦文類』の経・疏釈の文が、墨書あるいは朱書によって記されるとともに、一部に訓点・声点が施されている著作である。この『観阿弥陀経集註』は、一九四三年に西本願寺で発見され、一九四四年にはモノクロ影印本が刊行されてその全容が公開されている。後、一九五二年に国宝に指定され、一九七四年

には再度、カラー印刷による影印本が刊行されている。

『観阿弥陀経集註』の制作年代については、その引用疏釈の中に、善導著作の五部九巻のうち『般舟讚』が引用されていないことから、静遍によって御室仁和寺経蔵から『般舟讚』が発見された建保五年（一一二七）、すなわち親鸞四十五歳以前の成立とみなされているが、その上限については、

「源空上人の、門人として常に指導を受けつゝ、ある際に、筆を執られたものと推定するのが最も妥当である。即ち宗祖三十一歳前後の作と見るのが安全であらう。朱書された分は、書風から考へても、時代は幾分下がるやうであるが、殊に『楽邦文類』の一条は流罪以後であらうと思ふ。」（影印本『観無量寿経集註 附阿弥陀経集註』禿氏祐祥解説・一九四四年）

「この『註』には、少々後の追記とみるべき点もあるが、その大体は法然上人の門下として東山吉水にいた頃の集記と推定さるべきであらう。」（影印本『観無量寿経集註 附阿弥陀経集註』宮崎圓遵解説・一九七四年）

といわれるように、親鸞が法然と値遇して間もない時期にまで遡るものと位置づけられている。

周知のように、法然は「浄土宗」という一宗の独立を宣言するにあたり、その根拠を「偏依善導一師」(『選択本願念仏集』)と言い切っている。『観阿弥陀経集註』には、「浄土宗のひとつ」(『末灯鈔』第六通)となつた親鸞が、法然の提唱する選択本願念仏・専修念仏を、その根拠としてある善導の仏教了解にまで立ち帰つて確認しているとする営為が如実に示されているといえよう。

しかし、従来の『観阿弥陀経集註』の研究史を見ると、上記の視点は十全に反映されているとはいえない。この点について、先学の論考を見ると、

「集註の性質そのものは浄土教の一学徒として精選を続けつゝ、ある際の産物であることを示すもの」

(忝氏祐祥前掲解説)

「この両経の『註』二巻は聖人の自用のものであるが、(中略筆者)本書は関連の経釈の文を引抄するばかりで、聖人の解釈や意見を示すものはない。」(宮

崎園遊前掲解説)

「真蹟の本書を通じてみるところ世に公開するほどの筆意は認められない。ただ経文の行間や余白に諸師の釈文を書きこんだ自習の書にすぎない。そこには著者自らの意見(私釈)は一言半句も述べられていない。ただ引文の筆致にその筆意をうかがうだけである。」(小川貴弼「観阿弥陀経集註について」・一九六一年)

「原本からうける感は書入れ本の程度をいでないから、厳密には未定稿『集註』とも云うべきものである。」(同前)

という指摘に見られるように、『観阿弥陀経集註』を親鸞の「自習の書」として位置づけるにとどまっている。

もちろん、『観阿弥陀経集註』には親鸞自身の私釈(いわゆる「御自釈」)は記されていない。しかし、その点のみをもつて親鸞の「解釈や意見を示すものはない」とまで断言することには、いささかの問題があることを指摘しなければならぬ。

『観阿弥陀経集註』を、経文とそれに関わる註記の様態に注目して見るとき、経文に対する註の記され方は、

決して漫然と記されたものではないことが明瞭である。ことに『観無量寿経』本文と善導『観経四帖疏』に基づく註の様態に注目するならば、「仏説無量寿観経一卷」という経題については、『観経四帖疏』「玄義分」釈名門によつて経題の註が記され、以降「如是我聞」から経の尾題に至るまで、『観経四帖疏』の「序分義」から「散善義」までの善導による随文解釈に従いながら註が記されている。それらの善導の釈文と親鸞が抽出する疏文の間には、親鸞による取舍選択がなされているのみならず、善導の疏文を『観阿弥陀経集註』紙面のどの位置に記すのかという点についても、一つの方針のもとに行われていることが窺われるのである。

『観阿弥陀経集註』は、冒頭にも記したように、経文の行間や上下の欄外、紙背に疏文の註記が行われているが、経文の行間に記すべき疏文、上欄に記すべき疏文、下欄に記すべき疏文、紙背に記すべき疏文というように、あらかじめ親鸞自身によつて『観経四帖疏』疏文の抽出と検討付けが行われていると思われる。また紙背に記す文についても、表に記した経文の位置に相当させて記す

箇所と、料紙の天から地までを貫く形で記す二つの形態を見ることができると言えようし、さらにいえば、親鸞が記す状況は、『観阿弥陀経集註』を製作するにあたって、親鸞が明確な思想(意図)をもっていたことを証左するものであると言えようし、さらにいえば、親鸞が『観無量寿経』『阿弥陀経』の教言に見出そうとした事柄、すなわち親鸞がいかなる事柄を課題としつつ仏教を学んでいったのかということをも明らかにするものとして位置づけなければならぬと考える。『観阿弥陀経集註』は、一九三一年、『親鸞聖人全集 註釈篇』の刊行の際、安井廣度によつてその本文の全体が活字化されている。しかし、この活字化は『観阿弥陀経集註』を表書と裏書とにわけてなされたものであるために、経文と註の文の位置関係、また註の文が記される位置と形態について見ることは困難である。前述した観点から、原本の形態にまで配慮した忠実なテキスト化が必要とされよう。法然との値遇以降、親鸞の生涯を貫いたのは、法然の「たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし」(『歎異抄』)という教言であり、「浄土宗のひとは愚者になりて

往生す」(『末灯鈔』)という教言にはかならない。親鸞が『顕浄土真実教行証文類』において、「具縛の凡夫」「屠沽の下類」「無戒名字の比丘」という言葉に集約しつつ明確にするのは、浄土真宗の人間観であり、その人間を悲引してやまない選択本願の道理の推求である。その意味で、『観阿弥陀経集註』を改めて親鸞の思索の端緒を示す著作として読解していく必要があると言える。

(本学専任講師 真宗学)

〈キーワード〉 浄土宗独立、善導、浄土真宗の人間観